最優秀賞（中学校の部）

僕の溝
（課題図書：地図を広げて）【感想文】

牛久市立ひたち野うしく中学校　１年　横川（よこかわ）　拓己（たくみ）

「地図を広げて」という題名や表紙の写真から、僕と同世代の主人公が何かしら悩み事を抱えていて道に迷ったり、友達に導いてもらったりする話だと思い読み始めた。

読み進めるうちに、主人公の鈴には僕と共通するところがたくさんあることに気がついた。クラスの子にどう思われているか気になったり、間違っていたらと怖くて思ったことをはっきり言えなかったりするところだ。鈴は特別心に大きな傷を抱えた女の子かと思っていたが、実は僕たちと同じどこにでもいる中学生なのだと思う。弟の圭もお母さんをなくして悲しみに暮れているのかと思っていたが、僕の妹より小さいのにずっとしっかりしていて、敬語もきちんと使える大人っぽい子だ。鈴は弟に優しくてお姉さんらしくしようと一生懸命だけれど「二人の間に挟まった何か」が邪魔をしていつまでたっても姉弟らしくならない。そんな二人がいつか自然な家族に戻ることができるのか心配で、早く新しい暮らしに慣れてほしいと思った。

終盤まであまり家族の仲が深まる気配はなく、また友人と鈴の学校生活もなかなか明るくならず、やきもきしながら読んだ。最後の、本当に最後の一ページで、みんなが少しずつ変わってきたことが分かった。それはほんの少しずつで、でも確実に前に進んでいるのだと思った。

僕にもぽっかり心に穴が空いてしまったことがある。日本に仲間や今までの生活を全部残して、行ったこともない外国に住み始めたときだ。僕が引っ越しした後も、仲間の時間は変わらず流れているのに、そこに僕だけがいないと考えると悲しい気持ちになった。僕と妹は同じ現地の学校に通い始めた。言葉が通じず不安な気持ちでいたが、妹が同じ学校にいると思うとなんとなく心強かったし、兄の僕がしっかりしないといけないと思い頑張れた。頑張り続けているうちに、家族との楽しい時間や新しい出会いが僕の心にあいた穴をすっかり埋めていることに気がついた。

どんな人の心にも穴や溝があって、それを埋めてくれるものを探しているのかもしれない。鈴のお母さんは「本」であったり、圭は「お母さんとの思い出」、お父さんは「川」だったりしたのかもしれない。

最初、圭は何故引っ越し先の市街地図を買ってもらったのかが不思議だった。でも、お母さんの大事にしていた猫や携帯の中のお母さんの写真を大事に思っている圭を見て、圭はお母さんが恋しいのだと分かり、お母さんの思い出を探して自転車で出かけているのかもしれないと思った。お母さんの声がきこえるかもと、あちこちお母さんのゆかりの地をまわっていた圭。圭に導かれて初めて昔みんな

で住んでいたアパートへ行った鈴。お互いがいたから、たどり着いた記憶。思い出した記憶には「なにもかも」があって「なにか」に大きく包まれていた。ときどきふと思い出すなんでもない家族の思い出。鈴は自分のからだのあちこちに潜んでいるお母さんの思い出に気づくことができたから、心の溝は優しい思い出で埋まっていったんだと思う。

この物語にでてくる人は大人も子供もみんな自分の思いを言葉にできないでいて、それがすれ違いを生んでいる。こころにもやがかかってしまうこともある。でも、みんな少しずつ変わってきている。心にあいた穴を埋めるには自分一人の力では困難で、家族や友人の力が必要なのだと思う。だから僕を支えてくれている家族や友達を大事にしていきたい。